

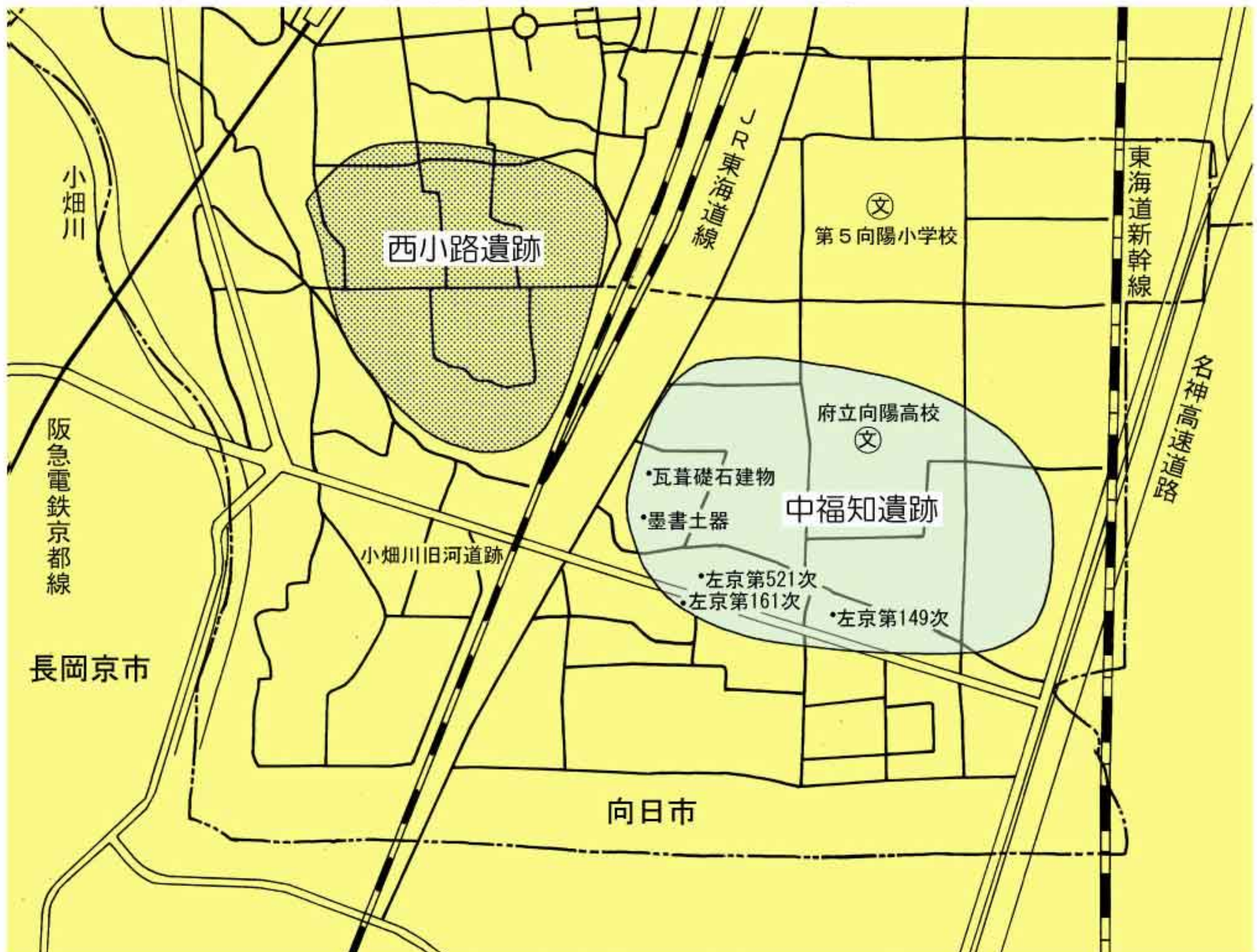
# 中福知遺跡(なかふくちいせき) ～平安貴族ゆかりの遺跡～

所在地 上植野町中福知・西大田・持丸・妙峠・桑原・樋爪・北淀井・南淀井・落堀・車返・大門・伴田・池ノ尻

中福知遺跡は、小畑川の形成した緩扇状地に立地する平安時代前期～鎌倉時代の遺跡です。1974～1975（昭和49～50）年にかけて行なわれた府立向陽高校建設前の発掘調査（左京第2・4次地点）で、平安～鎌倉時代の土壌、掘立柱建物が検出されたことが発見の契機です。その後、遺跡内の調査で、柱穴群や井戸、土壌などが検出されて様相が明らかになってきました。

遺跡の西側では平安時代前期の瓦葺きの礎石建物が確認され、官衙（役所）の中心建物と推定されました。軒瓦は平安宮豊楽院と同一のものが使用されているので、延暦16（797）年の「長岡京南に国府を遷す」（『日本紀略』）と記される山城国府跡である可能性もあります。その南側の調査では、平安時代前期の土器とともに「政所」「料理回」「客人」等と記された墨書土器が出土しています。檜皮も大量に出土したことから、瓦葺きの建物以外に檜皮葺建物も存在していた事が明らかになっています。長岡京の旧地は、平安時代になって貴族に分け与えられます。遺跡から出土する土器の内容は、平安京内の出土傾向と似ていることから平安貴族に関係する施設が存在したことを伺わせます。

平安時代後期（11世紀）～鎌倉時代（13世紀）には旧小畑川の氾濫原上に水田や畑地に囲まれた小規模な集落が成立します。その後、集落は現在の小字北小路・西小路などが所在する段丘上に移動します（西小路遺跡）。そして、この集落が現代の上植野集落につながるのです。中福知遺跡は上植野集落の始まりと考えられます。



中福知遺跡・西小路遺跡位置図 (1/10,000)





▲ 平安時代中期の重なり合った掘立柱建物  
(左京第161次：上植野町伴田)



▲ 平安時代の炭の詰まった土壙  
(左京第521次：上植野町落堀)

平安時代の中頃まで、一文橋付近から東に向かって流れていた小畑川旧流路の南側でも平安時代の掘立柱建物や土壙が検出されています。遺跡が、小畑川を挟んで南北に広がっていたことがわかります。平安時代後期から鎌倉時代になると流れが止まった小畑川の川原にも集落が広がります。人々は、川原の上の小規模な家を立て、井戸側に薄板で作られた曲物を利用した井戸を掘って住んでいます。

集落の中は、左や左下の写真でもわかるように家を作る場所とそうでない場所(空き地や耕作地)を分けています。その境には柵や溝を設けて区画しています。集落内には、こうした居住域と生産域などが点在していたと思われます。



▲ 平安時代後期の柱穴群と溝群  
(左京第521次：上植野町落堀)



▲ 平安時代中期～後期の柱穴群と井戸(左京第149次：上植野町桑原)



▲ 平安時代の曲物井戸  
(左京第149次：  
上植野町桑原)

中には投棄された土器や崩れた落ちた曲物の井戸側が見られます。